

# JIRON KOHRON I

遂に娘婿・クシユナー氏も捜査対象に

## 「ロシア・ゲート」で 七転八倒のトランプ大統領

国際ジャーナリスト

泉 洋海

### 異例の特別検査官任命

昨年の米大統領選にロシアが干渉したとされる問題は、トランプ米大統領の弾劾裁判にまで発展する見通しとなった。当時のトランプ陣営がロシア側と共謀した可能性を捜査していた連邦捜査局（FBI）に対し、トランプ氏が捜査を妨げる「司法妨害」をした疑惑が高まっているためだ。カギを握るのは、5月初旬に突然解任されたFBIのコミー前長官。野



特別検察官となったロバート・モラー氏

党民主党は、弾劾裁判を視野に真相究明に乗り出す構えだ。

かつて共和党が民主党の盗聴を図った問題で、共和党のニクソン大統領が捜査を妨害し、辞任に追い込まれた「ウォーターゲート事件」になぞらえ、「ロシアゲート」と呼ばれている。発端は昨年の米大統領選で、ヒラリー・クリントン元国務長官に対し、サイバー攻撃がなされたのではないかととの疑惑だ。

これにはロシアが関わっているのではとの憶測があり、さらにトランプ陣営の幹部がロシアと共謀し、クリントン陣営を妨害したのではないかととの疑惑が持たれている。

これに関してFBIは今年2月、トランプ氏の側近であるフリン前大統領補佐官が、駐ロシア大使に将来の対口制裁緩和の密約をしたのではないかと疑い、捜査していた。

トランプ氏は「彼を見逃してやって

くれ」などと、コミー前長官に捜査中止をほめかしたと疑いがあり、「捜査妨害」の上、解任した疑いが強まっている。

ホワイトハウスは、コミー前長官の解任は、クリントン元国務長官のメール問題で訴追を見送ったことなどを問題視したとしているが、政権発足から数カ月たつてからの解任を疑問視する声が上がっている。

一方、米ニューヨーク・タイムズ紙は、トランプ氏がロシアのラブロフ外相と会談した時に、コミー氏のことを「変人。いかれている」と称し、「私は大変な圧力を受けていたが、取り除かれた」などと話していたと報じた。

これが本当ならば、トランプ氏がFBIからの捜査を「圧力」と感じていたため、コミー氏を解任したと取れる。司法妨害があったかどうかを認定する調査に影響を与える可能性がある。

世論の批判を恐れてか特別検察官任命に舵を切った司法省



さらに、米ワシントン・ポスト紙などは、トランプ氏がロシアのラブロフ外相とキスリヤク駐米大使に、過激派組織「イスラム国」（IS）に関する機密情報を漏らした、と報じた。情報はイスラエルから提供されたとされる。情報にはISのテロ計画など



追いつめられるトランプ大統領(ホワイトハウス)

同盟国を通じて入手した繊細な情報も含まれており、情報提供者が危険に晒される恐れもある。トランプ氏は機密の扱いや、同盟国とのルールも知らないという批判が高まっている。

事態を重く見た米司法省は、ロシア疑惑の追及を進めるため、特別検査官としてロバート・モラー元FBI長官を任命した。モラー氏はブッシュジュニア、オバマ時代の2001年〜13年にFBI長官を務めた。

公平な硬骨漢として知られ、共和民主両党に評価が高い。

モラー氏の長官時代にコミー氏は副長官として使えており、トランプ政権の捜査妨害疑惑に関し、証言や証拠が得やすい環境にあるといえる。司法省は当初、特別検査官の任命

に消極的だったトランプ氏に近く、任命権限を持つセクションズ司法長官は、キスリヤク駐米ロシア大使と接触したとして、関連の調査から外れていた。このため、ローゼンスタイン副長官が任命の判断を代行した。特別検査官任命の判断に傾いたのは、コミー前長官の解任を巡り、トランプ氏がツイッターなどで放言を繰り返し、これを司法省がかばう格好となったことから、世論の矛先が司法省に向いたからだ。

失った信頼を回復するため、検査官を任命し、疑惑追及への姿勢を明確にしたといえる。コミー氏は、トランプ氏と会った際に話した内容を全てメモに記録し、複数のFBI幹部と共有しているという。同氏は夕食会などコミー氏との3度の会話で、自らが捜査の対象になっていないことを確認したとされ、トランプ氏がFBIの捜査に圧力をかけた可能性は否定できない。

コミー氏のメモや証言で、トランプ氏側の「捜査妨害」が認められるのが今後のポイントになる。

### 「政治家に対する魔女狩りだ」

「米国史上最大の、政治家に対する

魔女狩りだ」――。トランプ氏は早速得意のツイッターに投稿し、不満を隠そうとしなかった。発表した声明では「徹底した捜査により、陣営といかなる外国にも共謀はなかったと証明されるだろう」と強気だった。トランプ氏にとつて、モラー元FBI長官が特別検査官に選任されたことは想定外だった。モラー氏は真つすぐな人で、モットーは「真実を突き止め、正義を全うする」ことだと言う。

日米関係に詳しい歴史学者は、コミー前長官の解任は結果的に、モラー氏による厳しい追及を招き、トランプ氏は自らの首を絞めることになる」と指摘する。つまり、コミー氏解任がトランプ氏の「転落の始まり」になるというのだ。さらに、米紙によると、トランプ氏の長女の夫で、同氏の信望が最も厚いジャレッド・クシュナー大統領上級顧問がロシア疑惑に絡み、捜査線上に浮上しているという。トランプ政権が危機的状態にあることは否めない。

かつて1972年、民主党全国委員会本部に盗聴器が仕掛けられそうになったウォーターゲート事件は、当時のニクソン大統領が捜査に介入し

て、大統領罷免の弾劾手続きが始まり、ニクソン氏は結果的に辞任に追い込まれた。それに倣い、ロシアゲートと呼ばれる今回の事件はどういった展開になるのか。秋の中間選挙の結果にもよるが、トランプ氏は1年以内に大統領の座を負われる、との臆測も出ている。

過去には、ビル・クリントン氏も大統領時代、不倫のみ消し疑惑で弾劾裁判にかけられたが、有罪とする議員が出席議員の3分の2に満たず、大統領職の罷免は免れた。

トランプ氏が弾劾裁判で辞任に追い込まれれば、米国史上初となる。今後、疑惑を追及するFBIとの闘いはどちらに軍配が上がるのか。しばらくは、米国政治から目が離せない。

クシュナー大統領上級顧問

